

## 巻頭言 「角度をつけて語る」

宇野 元

エミリー・ディキンソンが残した詩 1775 篇の中に、紙切れに鉛筆で書き付けたこんな言葉があります。

余すところなく真理を語れ、しかし角度をつけて語れ  
コツは、回り道をすること

「角度をつける」というのは味わいのある表現です。真理を語るのに、威圧的な調子を避けておだやかに語る、想像力を働かせて語る、愛ある心で語る、そのような意味が含まれていると思います。ある批評家は、この表現を、イエス・キリストの語り方と結びつけて考察しています。

なぜ、彼女はそのように語ろうとするのでしょうか？

私たちの淡い喜びに見合うものとしては、明るすぎるからだ  
真理の偉大な驚きは

……

真理は時間をかけて光を増すのがいい

……

説教と同様に、詩にとってもだいじなのは真理。けれども、真理には大きな力と共に危険も伴います。日光がじかに当たると眩しいように。斜めから差す光が目によさしく、物を把握するのに役立つように、詩人は比喩的な言葉を用いて語るよう促されます。

ディキンソンの言葉は、牧師たちに、いつも率直に語ればいいわけではありませんよ、とアドバイスしているでしょう。そして私たちの普段の言葉について大切なことを知らせてくれていると思います。言葉についてだけでなく、心持ちについても！

「愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。……愛は忍耐強い。愛は情深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」(1 コリント 13, 4-7)。